

住まいの変容と伝統儀礼

— 沖縄県小浜島のヒンプンを中心に —

森 隆 男

はじめに

住まいが創出する景観は、伝統的な住まいが消滅するにともない大きく変容した。沖縄県国頭村安波は茅葺民家の集落景観が最も良好に残存していたが、この二〇年間にほとんどの茅葺民家が消滅した。そして住まいそのものも外観が変容し、南西諸島の住まいの特色のひとつであるヒンプンも消滅した^①。このような傾向は沖縄地方だけでなく宮古地方でも同様である。ところが八重山地方の西表島の干立や祖納、鳩間島、小浜島では、ヒンプンが今なお比較的濃厚に残存している^②。ヒンプンとは中国語の屏風（ひんぶん）に起源をもち、一般的には門を入ったところに魔よけと目隠しのために設置されたといわれている^③。

私が調査を実施した小浜島では、近年新築された住まいでもヒンプンが設置されている。そして石垣やヒンプンなどが創出する集落

の景観が、「沖縄百景」にも選ばれた。しかし変容の視点でヒンプンの機能や集落の景観を検討すると、別の解釈も可能になる。

本稿ではまず小浜島と沖縄本島におけるヒンプンの残存状況、材料や形態に注目し、聞き書き調査の成果によって時系列に整理して変容を検証する。さらに、小浜島のヒンプンについて、日常の暮らしに加えて年中行事・通過儀礼のなかでどのような機能をもっていたかについて分析し、当地に濃厚に残存する背景を考察する。あわせてヒンプンを含む住まいと集落の景観の変容についても言及したい。

一 小浜島における残存状況

小浜島は石垣島と西表島の間に位置する面積八・一四キロ平方メートル、周囲一六・五七キロメートルの島で、大岳（うぶたけ標高九九・四メートル）を中心に丘陵地が広がる。地下水が豊富なためかつては

水田が多かったが、現在はほとんどサトウキビ畑になっている。主たる集落である小浜は島のほぼ中央にあり、島の南西部には小規模の漁村がある。小浜集落には南北方向に七本、東西方向に一〇本の道路が走る。これらの道路が作る集落形態が不整形であることから、高橋誠一は古い形態が残されていると指摘している。⁽⁵⁾なお小浜島にはかつて九集落があったが、近世中期の明和の天津波で四集落が被害を受けて現在のようにならざるに高台に集落を形成したとされている。



写真1 小浜の集落

この島には二〇〇九年末現在、三〇三戸、五三〇人が住むが、空き家も目立つ。⁽⁶⁾

今回調査の対象にした小浜集落は屋敷の総区画数一七二で、ほとんどの住まいが南面している。ヒンプンが設置されている屋敷はこのうちの七二で、全体の四二パーセントに当たる。集落の北部に濃厚な分布が認められるが、この地域は比較的早く開発されたといわれる。一般的なヒンプンの規模は長さ約四メートル、高さ一・五



写真2 石のヒンプン
〔「ちゅらさん」の舞台になった住まい〕



写真3 重厚な石のヒンブン

メートル、幅〇・五メートルである。しかしO氏宅の石製のヒンブンは長さが六メートル、K氏宅の石製のヒンブンには屋根があり、長さが六メートル、高さが一・八メートル、幅〇・九メートルの規模がある。一方、N氏宅の板製のヒンブンは長さ二・五メートルで、軽量であり地面に埋め込んでいないため移動が可能である。このように現在みられるヒンブンは、形態や規模が多様である。



写真4 最も多いブロック製のヒンブン

ヒンブンの材料は全体の六〇パーセントに当たる四三例がコンクリート製のブロック、九例が板、七例が低木の木や生垣、六例が石、四例が土と漆喰、三例が竹である。松原保氏（一九二四年生まれ）によると、昭和三〇年ごろまでは竹を編んだものが多かったという。当地での呼称であるマイマキは、本来竹のヒンブンを指す。村役人の家柄をもつ住まいでは、古くから切り石製のヒンブン



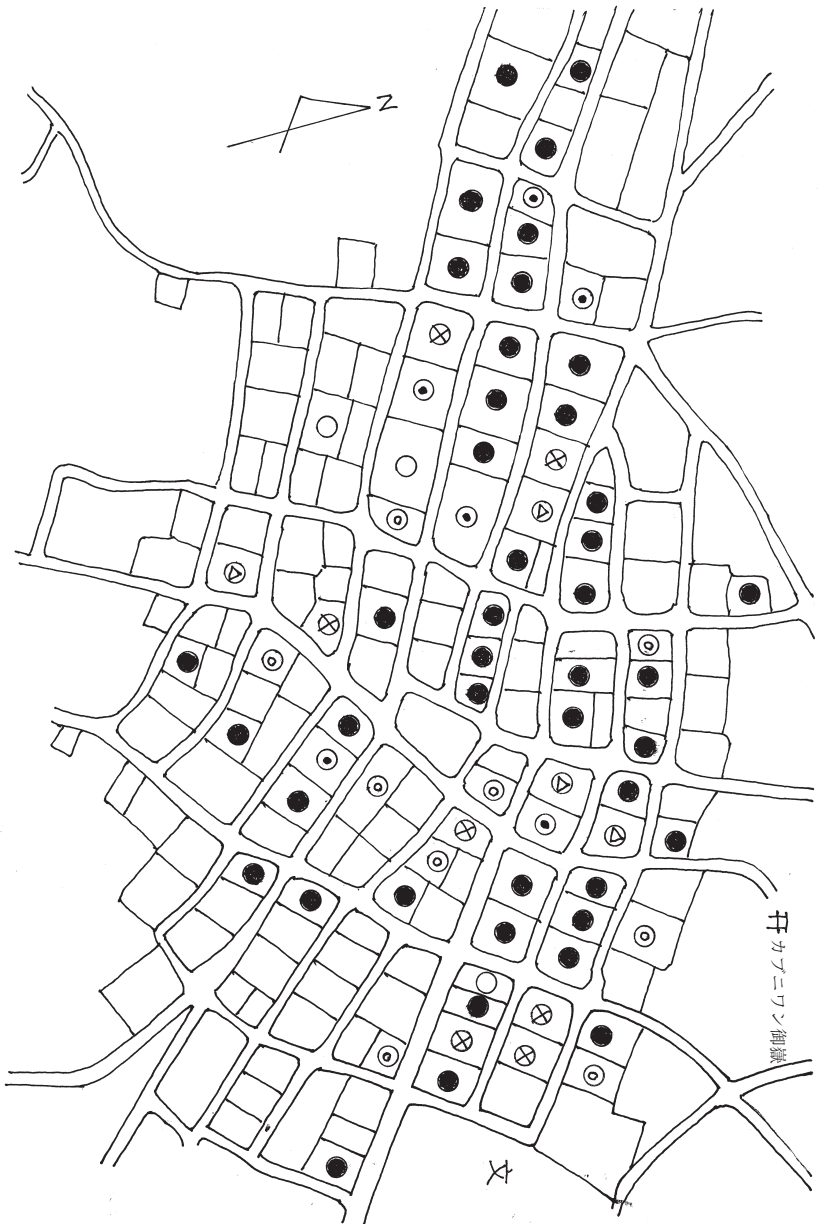
写真5 マイマーキ
(本来の竹のヒンブン)

を設置していた。墓を造った残りの石を使用したともいわれている。サンゴ礁の石を切り出して水牛に引かせて運ぶため多くの労力が必要で、切り石製のヒンブンを設置することは経済力のある家だけが可能であった。また一般の住まいではサンゴ石をそのまま積み上げたヒンブンや、瓦のかけらを土で固めさらに漆喰を塗ったヒンブンもみられた。コンクリート製のブロックを使用したヒンブンは昭和三〇年代の中ごろに登場した。堅牢で手軽にできたため、その



写真6 瓦を土で固めたヒンブン

後の主流になった。サンゴ石のヒンブンにはハブが潜むことも多く、ハブの被害を免れるためにもブロック製のヒンブンが普及した。^⑦そして二〇数年前から生垣や板製のヒンブンが作られるようになった。つまり当地の庶民の住まいはかつて竹で作ったヒンブンが多く、一部の旧家と資産家だけが切り石製であった。昭和三〇年代の中頃からブロック製のヒンブンが設置されるようになり、現在は六割を占めている。昭和三〇年代は住まいそのものの材料に、コン



- フロック
- ◎ 板
- 石
- ⊗ 生垣
- ⊖ 土・シロくい
- 竹

図1 小浜集落のヒンブンの分布



写真7 板製のヒンピン

クリートやブロックなどの新建材が採用され始めた時代でもあった。平成に入り、生垣や板製のヒンピンが増えてきた。スイズギを取り付けたリ、フラワーポットを置くなど装飾的な要素が加わったのもこの段階である。近年では、屋根と塀、ヒンピンを同一の赤瓦を使用して造った住まいも登場している。

坂本磐雄は八重山地方の集落における石垣やヒンピンなどの敷地囲いが創り出す景観について成果を発表している。小浜集落につい



写真8 屋根・ヒンピン・塀を同一の赤瓦で統一した住まい（以上小浜集落）

てもデータを提示しながら論述している⁸⁾ので、ここでは昭和四〇年代に行なわれたと思われる調査のうちのヒンピンに関するデータを借用して、約四〇年間の変容を把握したい。それによると材料別ではブロック一七例、石一二例、木と生垣一〇例、板五例、竹三例の計四七例である。注目したいのは数字の上で二五例増加している点である。前述したように、他の地域ではヒンピンが減少・消滅しつつある中で、この集落では逆に増加しているのである。これは聞き

書きでも確認でき、最近、新築された住まいでもヒンプンが設置されている。材料別にみると、石が半減する一方ブロックが二六例も増加している。この点も聞き書きで得られた丈夫で安価な新建材が採用されたという情報と一致する。さらに板が五例から九例に増加している点にも留意しておきたい。板製のヒンプンは他の材料と異なり、必要に応じて移動できるからである。

二 沖繩本島における残存状況と材料の変容

沖繩本島での主たるフィールドに選んだのは、名護市嘉陽集落である。昭和五〇年代に全集落について建物配置、ヒンプンの有無などが調査され、それらを図示したデータが『名護市史 本編・一 わがまち・わがむら』として刊行されている。それらの集落の中で集村の形態をとり、当時、比較的多くのヒンプンが確認できるのが嘉陽集落であるからである。また比較検討のため、同様の条件をもつ数久田集落と山入端集落についても簡単な調査を実施した。

嘉陽集落は太平洋に面した砂質の低地に位置し、集落内を通る東西四本、南北三本の道が碁盤目状の屋敷地を形成している。アガリ(東)とイリ(西)の小字からなり、アジヌヤーやニガミヤー、ニーブガミ、ヌンドウルチ(ノロ殿内)などの聖地はアガリに配置されている。また南北三本の道は、旧二月一六日の「浜下り」に使用され、一二月の「鬼餅」の際にはこの道の出入り口に豚の骨を十字型にして吊るし、悪霊の侵入を防ぐ。ヌンドウルチのすぐ東側を浜に

向かって通るヌンドウルチジョウグチは葬式の際に通行ができないカミミチである。集落の北東に位置する小山の山頂には御嶽があり、この山の木を伐採することは禁じられていた。浜から約百メートルの沖にはキョウと呼ばれる岩場があり、四月二〇日に行なわれるアブシバレーの行事ではかつてノロがキョウに渡り、そこから芭蕉で作った小船を流して「虫」を流したという。集落の西方の山裾には墓地が広がる。戦前の葬儀では、集落の西端に架かる嘉陽橋付近で一度竈を置いてシマワカレをし、川を越えて墓地に向かった。このように集落とそれを取り巻く空間には多様な聖地が配され、明確な秩序が創りあげられているといえよう。

前出のデータによると、昭和六一年当時、嘉陽集落は世帯五九、人口一三八、サトウキビの栽培が主産業の村である。約六〇の敷地のうち一九例のヒンプン(当地ではヒンプンと呼んでいるが、ヒンプンの名称を使用する)が確認できる。今回の調査時には世帯が約四〇に減少し、生垣一五例、板製二例、ブロック一例の計一八例のヒンプンが残存していた。しかし、この中には無住の敷地も含まれており、ヒンプンに関わる文化は明らかに衰退している。当地に住む翁長良一氏(昭和二二年生まれ)と知念政光氏(昭和二八年生まれ)によると、ヒンプンは新築の際に撤去されて、再度設置されることはほとんどなかったという。

当地で八〇年間暮らしてきた比嘉小夜子氏(昭和三年生まれ)はヒンプンの変容をみてきた一人である。昭和一〇年ごろにはほとん



写真9 ヒンブンの名残りを伝える生垣
(嘉陽集落)

どの住まいにヒンブンが設置されていた。材料は竹で、それらを編んで縦に立てて目隠しにしたという。戦後は竹製のヒンブンを職人がいなくなり、昭和二〇年代に急減した。残ったヒンブンも数本の低木を生垣にする形態に変わっていった。当集落ではコンクリートブロック製のヒンブンは普及しなかった。なお、「浜屋敷」の屋号をもつ旧家には、生垣のヒンブンの根元に、長さ一四三センチ、高さ一七センチ、幅一四センチのサンゴ石で作ったヒンブンの



写真10 物干しに利用されるヒンブン
(数久田集落)

一部が残っている。銘から大正二年に設けられたと推測される切石製の塀も残っており、その開口部から判断すると長さは少なくとも三メートル程度はあったと思われる。この事例は旧家ではかつてサングの切り石で作ったヒンブンが設けられていたことを示しており、のちに生垣に変容したことがわかる。
数久田集落は、名護湾に面した低地に碁盤目状に形成され、昭和六二年の調査時に世帯数二七八、人口一〇七五の比較的大きな集落



写真11 廃屋に残るコンクリート製のヒンペン
(山入端集落)

である。当時少なくとも二三例のヒンペンがあったことが報告書からわかるが、今回は八例を確認したのみである。そのうち七例はブロック製で、一例が生垣であった。ヒチャークヤアの屋号をもつ屋敷には長さ六メートル、高さ一・五メートルのブロック製の大型ヒンペンが設置されていた。

山入端集落も名護湾に面した低地に基盤目状に形成された集落である。昭和五九年に北部工業高校の建築科の生徒によって調査が行



写真12 このように整備されたヒンペンは少ない
(山入端集落)

なわれた。当時、世帯数八四、人口二七六で、嘉陽集落に似た景観をもつ。当時一二例のヒンペンが報告されているが、今回、一〇例を確認することができた。そのうち六例が生垣、四例がブロック製である。「正仁屋」の屋号をもつ屋敷には竜の浮き彫りをしたブロック製のヒンペンが設置されており、装飾的な要素が強調されている。状況から判断して近年の設置であろう。

以上は名護地域の事例であるが、沖縄本島においてはかつてほと

んどの屋敷にヒンブンが設置されていた。¹³ 嘉陽集落での調査によると竹製のヒンブンが一般的であったようである。やがて数久田集落や山入端集落でみたようにブロック製のヒンブンが増加した。その時期はブロックが建築資材として普及した昭和三〇年代と考えられる。さらに二〇年ほど前からは生垣のヒンブンがみられるようになる。このようなヒンブンに関わる状況は小浜島と共通する。しかし、ヒンブンの分布は半世紀の間に減少し、文化としてのヒンブンはかなり衰退しているといってもいいだろう。

三 ヒンブンの機能と残存した背景

ヒンブンの機能について、一般的に目隠しと悪霊を避けるためと説明されている。小浜島での聞き書き調査では、目隠しを重要な機能としてあげる人が多い。実際に集落内の道を歩いて確認しても、室内の様子をみることはできない。三、四メートル程度の長さのヒンブンでは、一番座の一部が視野に入る事例もあるが、家族がくつろぐ二番座は完全に遮断される。長さが六メートルを超す規模のヒンブンでは、門からの距離にもよるが主屋のすべての部屋が完全に遮断される。また一・五メートルの高さは屋内の立った人物を、一・八メートルの高さは主屋の屋根から下の部分を視野から遮断する。さて福島俊介が、ヒンブンは目隠しでありながら外の気配まで完全に遮断する設備ではないという重要な指摘をしている。¹⁴ 道を歩く人の話し声や会話から客の来訪を察することができ、必要な情報を得

ることができることになる。

台風がしばしば来襲するため南西地方の住まいは、屋敷の周囲に石垣を築いたり福木などの植樹をして風雨から守る工夫がなされている。石やブロックを積み上げたヒンブンも同様の役割を果たしている。しかしかつては竹製のヒンブンが一般的であったとすると、風雨とくに風を完全に遮断するための装置であったとはいえない。小浜島では台風の来襲時には厚さ約三〇センチの茅の束を壁のように並べて竹のヒンブンに挟み込んだという。この茅の束は、ふだんはしまっておく。竹のヒンブンに隙間を空けて少し風を通し、住まいを湿気から守る工夫も行なわれていた。ここにも曖昧な遮断を選択する考え方が垣間みられる。

一方、集落内の各所に石敢當が設けられ悪霊に対する意識は高いと思われるにもかかわらず、ヒンブンが悪霊を避ける装置という意識は乏しい。かつて一般的にみられた竹を材料にしたヒンブンに、その機能を期待することは困難であろう。玄関の鴨居の上やヒンブンにスイズ具を取り付けている事例もあった。スイズ具はその形態から魔よけの呪具として使用されているが、伝統的な習俗ではなく単なる装飾であるという。このようにモノとしてのヒンブンから判断すると、目隠しの機能は妥当としても風除けや魔よけはヒンブンの主たる機能とはいえないのではなからうか。

ヒンブンが減少・消滅しつつある状況の中で、残存さらには増加の傾向にある小浜島の事例をどのように考えるべきなのであろう

か。一般的にはヒンプンが消滅していく理由について、道路の拡幅によって庭が狭小化したり、住まいの増改築の際に邪魔になったことなどがあげられている¹⁶⁾。また玄関の設置にともない、門から住まいに入るまで客や家族の動線が一つに固定したことも理由の一つとして考えられる。それまでは一番座や二番座に庭から直接入っていたからである。この集落でも、沖縄地域と同様三番座に玄関を付設する事例が増えてきた。しかしヒンプンは材料や形態は変容したが、私は年中行事や通過儀礼など伝統的な文化の中で重要な機能を果たしてきたため残存してきたと考えている。この点について検証してみよう。

小浜島では、日常の出入りには男女とも門からみてヒンプンの左側を通る。南面する住まいが多いので西側に当たる。とくに女性が右側を通ることはない。一番座に迎える重要な客のみが右側を通る。ところが年中行事や通過儀礼などの際に動線を明確にする装置として重要な機能を発揮する。

旧暦の六月に三日間、小浜島では豊年祭りが行なわれる。二日目の夕方、神聖な神アカマタとクロマタが各家を訪れる。その際に神々は必ずヒンプンの右側から庭に入る。神々を迎える着物姿の男性たちも必ずヒンプンの右側から入り、一番座に座って待つ。神々は無病息災と豊年の祈願の踊りをして、再びヒンプンの右側を通過して帰っていく。

同様の動きをする儀礼が益にもみられる。旧暦七月一三日から一

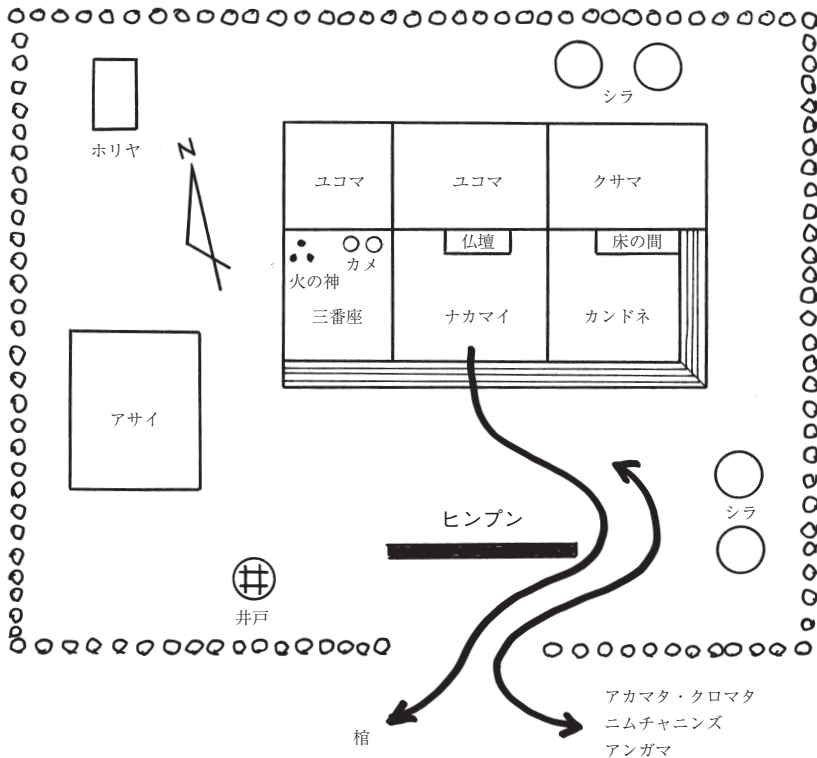


図2 小浜島の住まいの概念図

六日までの間にニムチャニンズと呼ばれる男性の集団が各家を訪れて盆踊りを奉納する¹⁷。彼らが屋敷に入る際は必ずヒンプンの右側を通って庭に入る。庭の中央に敷かれた二枚の筵に楽器を演奏する人たちが座り、歌と演奏に合わせてその周りをニムチャニンズは左回りに踊りながらまわる。そしてヒンプンの右側を通って次の家に向かう。盆の二日目には祖先の霊が具体的な姿を現したとされるアングアがそれぞれの住まいを訪れるが、やはりヒンプンの右側を通行する。なおK氏宅では盆や豊年祭りの際にニワを広く使用するため、日常の出入りは不便でもヒンプンを門に近い位置に設置したという。当家では門とヒンプンの距離は約一・五メートルで、大きな荷物を持って出入りする際はやや不便であろう。ちなみに当地では二メートルから三メートルの距離を置いて設置されている事例が多い。

通過儀礼においても同様で、祝儀の際は基本的にヒンプンの右側を使用して出入りする。たとえば前述のように女性は常にヒンプンの左側を通ることになっているが婚礼のときは例外で、新婦も親戚の一行とともに右側を通って一番座に入る。また葬儀のとき、棺は仏壇がある二番座に北枕で安置される。そして出棺の際は必ず右側を通る。

このように小浜島では、日常と非日常の暮らしを厳密に区別する意識が強い。とくに非日常時の住居空間に明確な秩序が顕在化し、それに従った行動が求められる。その際、視覚的に明確な基準を与

える装置がヒンプンである。庭に芝生を植えている家では、日常の通路になるヒンプンの左側には芝を植えずに土の通路にしている事例もある。

日常の生活では、ヒンプンの存在は見慣れた景観であり、とくに意識されることは少ない。しかし非日常の日に、ヒンプンはその存在感が意識される。すなわち住まいが集落空間と関わる儀礼の際に重要な秩序を創出する機能である。近年登場した、移動が簡易な板製のヒンプンも同様の機能をもっている。当地でヒンプンが必要とされる背景には、今なお伝統的な儀礼が価値をもち続けているからであろう。その機能が最も強く意識されるのは豊年祭りである。

ヒンプンが消滅しつつある沖繩の名護市嘉陽集落では、日常、非日常を問わず、必ずヒンプンの左側を通って住まいに出入りしたという。葬儀の際に出棺する場合も同様であった。当地ではかつて葬儀の際に遺族の女性は「天の神」に失礼であるとして、芭蕉布で顔を隠して参加した。厳重な禁忌が存在したにもかかわらず、通常通りヒンプンの左側を通行したのである。ヒンプンと主屋の間の空間をミヤと呼んでおり、これは「宮」すなわち祭祀儀礼の場であることを指していると考えられる¹⁸。また前出の知念政光氏は、ヒンプンの右側を「神の道」という伝承があったと記憶している。これらの情報は当地においてもヒンプンが、かつては住まいへの出入りの動線を決定する重要な装置であったことを示している²⁰。現在この機能が住民に意識されていないことが小浜島と大きく異なる点であ

る。

一方、小浜島でヒンプンの材料や形態が多様化し増加している点に注目すると、別の背景もみえてくる。二〇〇一年にNHKの朝のドラマ「ちゅらさん」が放送されて以来、小浜島に多くの観光客が訪れるようになった。島の南東部には大規模なリゾートホテルも建設されている。近年、装飾的な要素を加味したヒンプンが登場するようになったことも含めて検討すると、観光客の目を意識するようになった住民側の変化も考慮する必要がある。この一〇年間のヒンプンの変容については、観光化も背景にあるといえよう。

四 住まいとそれを取り巻く空間の秩序

ヒンプンが今なお重要な役割を果たしている小浜島では、住まいとそれを取り巻く空間には具体的にとのような認識がもたれているのであろうか。小浜島の住まいの概念図をもとに検討してみよう。

すでに指摘されているように琉球文化圏では東方と南方を優位とする観念が伝統的に存在²¹しており、住まいの間取りなどに影響を与えている。まず屋内からみてみよう。主屋ではオモテとウラが明確に意識されている。表側は東側からカンドネとよばれる一番座、ナカマイと呼ばれる二番座、三番座、裏側は一番座の裏がクサマ、二番座と三番座の裏がユコマと呼ばれる。一番座には床の間が作られ、儀礼の場と客間として使用される。二番座には仏壇が安置され、通常の客との応対や家族の居間に当てられる。三番座は食事の

場である。クサマはワカモノの寝室、ユコマは老人の寝室として使用される。ほとんどの家は東方に一番座を設定するが、地形や道路との関係で西方を一番座にする家もある。

住まいで冠婚葬祭の儀礼が行なわれるときは、一番座であるカンドネの東側から序列の高い客が座る。当地では年齢の高いものが上位とされるので、実際には年齢順に座ることになる。住まいに祀られている神も同様で、最上位は一番座の床の神、次がナカマイの仏壇に祀られる祖先神、三番座の火の神とする序列が確認できる。供物はこの順に供えられる。なお床の間には一般的には香炉が置かれ、福祿寿の掛け軸がかけられている。福祿寿はミルク（弥勒）の神で、家族の健康を守る役割が期待されている。床の神を水神とする伝承者もあった。

次に屋外に目を向きたい。ヒンプンは前述のようにナカマイの前に設置される。かつては稲穂を積み上げたシラが主屋の裏側の東寄りに作られた。主屋の前に作る家もあったという。シラは地面に石を置き、その上に稲穂を茅で包んで、茅の屋根で覆う。食べる分だけ稲穂の束を抜いて、脱穀・精白をする。稲穂は硬く積まれているので鼠が侵入することはない。なお、稲穂三〇束を一〇〇積み上げたものを一カラシラと呼び、その数の多さが財産の目安になったという。主屋の西に造られるアサイは本来炊事場で、竈が築かれていた。暖かい部屋なので冬季は火の番を兼ねた老人部屋になった。アサイが残存しているのは二軒だけで、多くの家では炊事場の機能を

主屋の三番座に移している。残存している事例でも、現在は物置になっ
ている。アサイの前に井戸を掘っている家もある。地下水が豊
富な当地では井戸を掘り、飲料水や生活用水に当てている。井戸の
位置は南東に当たり、風水思想が反映している可能性がある。主屋
の北西にはホリヤと呼ばれる便所があった。この位置に便所が残る
事例は多い。奄美や沖縄地域にみられる高倉が当地に造られること
はなかった。



写真13 住居空間におけるヒンブンの位置
(小浜集落)

さらに集落空間についても触れておく。屋敷は石垣の塀と福木で
囲まれており、独立した空間といえる。辻に面したところには石敢
當が築かれている。集落内は網目状の道路が走っている。豊年祭り
の際、アカマタ・クロマタの神は、集落の東方から訪れ、必ず道路
を西に向かって歩いてそれぞれの住まいを訪れる。なお集落の北東
にはひとときわ目立つ樹叢があり、その中に聖地カブニワン御嶽があ
る。

以上のように住まいとそれを取り巻く空間では、常に東側が上位
と意識される。とくにハレの日はその秩序が明確に意識され、ヒン
ブンの設置はこの秩序と連動しているといえる。琉球文化圏の住ま
いに共通して設置されていたヒンブンについて、変容を視点に検討



写真14 豊年祭に参加する人はクバの扇を
持つことが求められる(小浜集落)

すると八重山地方の文化的特性がみえてくる。日常と非日常の強い差異化と伝統儀礼に対する保守性である。

五 住まいと集落景観の変容

本稿で取りあげたヒンブンは、外来者には台風の来襲時における防衛と屋内での私的な生活を隠すプライバシーを守る機能を予測させる。しかし住民の目で集落の中で形成されている方位観と伝統的な儀礼との関わりで理解しようとするとき、別の重要な機能がみえてくる。住居空間の秩序の基準という機能である。豊年祭りに代表される伝統的な文化が価値をもち続けている小浜集落では、変容しながらもヒンブンが残存することになった。

ヒンブンが残存することで琉球地方の独自の景観が残存することにもなる。ただし材料が変容した今、かつての景観がそのままみられるわけではない。現在の集落内の景観は舗装された道路の両側をコンクリートの塀が続き、住まいの入り口には石やコンクリートブロックのヒンブンが設けられて視界をさえぎるという比較的厚重的な印象を与える。また赤瓦を葺いた屋根にはシーサーが取り付けられており、芝生の緑も加わってカラフルな印象を与える。しかし半世紀前までは土の道路に曲線のサンゴ石の塀が続き、塀の切れた門の奥には竹で作ったヒンブンがみえるという、明るく開放的な景観であったはずである。切り石や土で作った厚重的なヒンブンは一部の住まいだけであった。屋根はほとんど茅葺で、当然シーサーが取り付

けられることもない。芝生を植えている住まいもなかったという。伝統的な景観として紹介される集落や住まいのあり方も、歴史的に変容を検証するとかなり違ったものになる。

竹富島は重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けて、景観も含めた凍結保存がはかられている。小浜島の場合は暮らしや伝統文化に対する住民の価値観の変容に任せて、ゆるやかな保存措置をとる選択肢もある。

本研究は、平成二二―二三年度関西大学学術研究助成基金（共同研究）において、研究課題「八重山地方の文化的特性に関する研究」として研究費を受けたものの成果として公表するものである。

- (1) 森隆男「沖繩の住まいと暮らし」『民俗建築』第一二八号 日本民俗建築学会 二〇〇五
- (2) 坂本磐雄「沖繩の集落景観」一五八頁 九州大学出版会 一九八九
- (3) 『沖繩大百科事典』「ヒンブン」の項、沖繩タイムス社 一九八三
- (4) 黒島精耕「小浜島の歴史と文化」九二頁 二〇〇〇
- (5) 高橋誠一「琉球の都市と村落」二五五―二五八頁 関西大学出版部 二〇〇三
- (6) 一九九〇年代の調査では空き家率が二〇・六パーセントにのぼっていたという（武者英二・永瀬克己「八重山地方の建築的遺構と民家・集落」法政大学沖繩研究所・沖繩八重山調査委員会『沖繩八重山の研究』三九〇頁 相模書房 二〇〇〇）

- (7) 前掲②一五八頁
- (8) 前掲②一五七頁
- (9) 『名護市史 本編・一』 わがまち・わがむら』 名護市役所 一九八八
- (10) 『名護市史 本編・九 民俗Ⅲ 民俗地図』 二五三～二六〇頁 名護市役所 二〇〇三
- (11) 前掲⑨ 七一八～七一九頁
- (12) 前掲⑨ 一五八～一六〇頁
- (13) 前掲⑨ 三三二～三三四頁
- (14) ヒンブンは奄美群島の全域にもみられたが、上層階級の住まいに限定されていた(窪徳忠「奄美群島における中国的習俗」『南島史学』第一四号 一九七九
- (15) 福島駿介『琉球の住まい―光と影のかたち』 六四頁 丸善 一九九三
- (16) 前掲②一五八頁
- (17) 前掲④ 九一頁
- (18) 『名護市史 本編・九 民俗Ⅰ・Ⅱ』 三五九頁 名護市役所 二〇〇一
- (19) 仲松弥秀はミヤーとテラの起源を墓とし、さらに神の座と解釈している(仲松弥秀「テラとミヤー」『沖縄文化』二二号 一九六六
- (20) 私が昭和五七年に沖縄県国頭村安波を訪れた際は、当時多くのヒンブンが残存していた。男性客やその家の主人はヒンブンの右側を、女性客やその他の家族は左側を通って主屋に向かう。出棺も左側を通行するということがあった(森隆男『住居空間の祭祀と儀礼』一四〇頁 岩田書院 一九九六)。
- (21) 馬淵東一「南方の世界観をめぐって」『馬淵東一著作集』補巻 社
会思想社 一九八八

Transfiguration of Accommodation and Traditional Rituals

—Mainly about *Hinpun* in Obama Island of Okinawa

MORI Takao

Traditional accommodations have rapidly disappeared amongst the South West Archipelago. *Hinpun*, which is one of the characteristics for the accommodation amongst the South West Archipelago and is placed behind the gate as a charm as well as a blindfold for the house, is one of such items facing to decline and disappearance. Such tendency is not only observed amongst Okinawa region but also remarked amongst Miyako region. Amongst the isles of Yaeyama region, however, the tradition of *Hinpun* still remains strongly. For instance, within Obama Island where the author explored this time, even accommodations of recent construction have *Hinpun*. One of the reasons could be that *Hinpun* in this particular island still works as an important utility for people's basic movements within traditional rituals such as festivals for the good harvest or *Bon*, funeral and etc. East is always considered superior direction when it comes to accommodation and space surrounding it. Especially on the day of *Hare*, the special day, such order is clearly aware of and the establishment of *Hinpun* is apparently linked with this methodical order. The survey on *Hinpun* which has been commonly placed for accommodations in the regions under Ryūkyū culture from the point of view of transfiguration would show us the cultural characteristics of Yaeyama region. It is the strong differentiation between daily and not-daily phenomena as well as the conservatism for the traditional rituals.